

流域市民活動と行政・企業・大学 連携による環境貢献の未来

岸 由二 NPO法人鶴見川流域ネットワーク代表理事／慶應義塾大学教授

鶴見川流域ネットワークの代表をしております。慶應義塾で生物学の教員もしておりまして、動物行動学の分野で、和光大学の堂前先生とも、すこし重なる領域にあります。

鶴見川は、洪水と汚染と自然破壊の川として大変に有名でした。今もまだ、洪水の危機が大きく去ったわけではありません。温暖化で、下流部などでは、場所によってさらに危機の潜在的な規模が増しているというところもあるはずです。しかし、汚染はかなり改善されてきました。都市の清流までもう一息です。流域の緑の破壊は極限まで進行する寸前でしたが、ここ10年ほどは守るべきものをしっかり守り、回復するものを回復する、良い回路に入っているかと思います。この危機と希望の流域を持ち場として、治水の課題、汚染の課題、環境全般の課題に協働でとりくむ流域活動として鶴見川流域ネットワーク（以下TRネット）が始まって今年で18年目になります。流域の課題、行政の対応などを踏まえつつ、TRネットがすすめてきた仕事、行政、企業、大学等との連携について、今日はお話をさせていただきます。



——私の鶴見川治水体験

まずは、鶴見川の治水をめぐる私の個人史のようなものから、お話しさせていただきます。

1947年9月半ばにキャサリン台風が関東を襲いました。私は、その台風の豪雨が関東を覆い、氾濫真最中の目黒川のほとりのボロ屋で生まれたことになっております。1947年9月16日、台風がすぎて穏やかになった未明とのことです。その

後、鶴見に転居し、2歳から鶴見川下流で育ちました。そして、1985年まで、氾濫を繰り返す鶴見川河口の潮田という町で育ちました。頻繁に浸水にありましたが、母の工夫で家の土台が少し高くしてあったので、床上は1回だけでした。低地の友達たちの家は、数年に1回ぐらい畳の上まで水が入ったと思います。1958年の狩野川台風は日曜日だったはず。豪雨が續くなか、氾濫水が自宅前の路を激流になって流れていくのを見ていました。翌日、外に置いていた家財道具などが500mくらいの範囲に散らばってしまい、それから1週間ぐらい母親とリアカーで散ってしまった家財道具を回収したものです。なんども経験した中で、1966年6月の台風4号が一番恐ろしい台風でした。雨がどんなに降っても、我が家は大丈夫と思っていたのですが、夜8時頃に雨がやんで、半月の綺麗な空でしたが、水位が止まってもう大丈夫だと言った矢先、サラサラサラと上がって来て、どこまで上がるのか分からないので祖父と弟、妹を学校に逃がしたものの、畳も家財も水に浸かりました。過ぎてからしばらくは学校も始まらないし、町中がトイレの匂い、消毒剤の匂いに溢れました。旧東海道沿いの古市場に友達の家があったのですが、翌々日の晴天の日に行ったら、屋根まで全部つかって、家族3人そこにつかまって生きのびたと話してくれました。でも、新聞沙汰にもならなかった。

私は、もうとにかく洪水はこりごりで、結婚してようやく雨が降っても平気な鶴見のコンクリートの公団住宅の高層階に住みました。でも当初はよかったのですが、雨が幾ら降っても屋根をたたく音がきこえないのが気になって落ち着かなくなりました。不思議なものです。鶴見で体験した氾濫は1982年が最後です。自宅は高層住宅だったのですが、弟がまだ実家にいて、「水がきちゃった！ 助けてくれ」と電話がはいり、結局腰まで浸かって救出に行きました。それが最後です。

最後の洪水からもうすでに四半世紀がすぎました。今、鶴見川はどのくらい安全になったのでしょうか。1958年の大豪雨は、2日間雨量で340mmくらいだったと思います。1966年の台風4号は300mmちょっと、40mmぐらい少ないのに同じくらい凄い洪水になりました。その間の都市化で保水力が激減したからですね。ついこの間2004年に10個の台風が日本列島に上陸したことがあります。あの時の22号、23号が関東を直撃し、22号の際は多目的遊水地に120数万トン水が入った。その時の雨量が多分1966年の雨とほぼ同じか、ちょっと少ない位だと思います。1966年だったら死者もでる大氾濫になっていた雨量でしたが、2004年は氾濫しませんでした。多目的遊水地が水を抑え、雨水を調整する流域全体で3,300カ所の池が保水効果をみせ、^{しゅんせつ}浚渫された下流もしっかり水を流し、治水対策が効いたせいだと思っています。その秋は、下流綱島付近では実は23号の方が降り方が怖くてかなりの内水氾濫状態（市街地に降った雨水が河川に排出できない状態）となりました。雨が降り止んですぐ横浜綱島にあるNPOの事務所の車で新羽橋に様子を見

に行きました。濁流が渦を巻き、足元の特別細い土手がドドドドと揺れていて、土手脇の飲食店のオヤジさんが出てきて「怖かった怖かった」と言っていました。

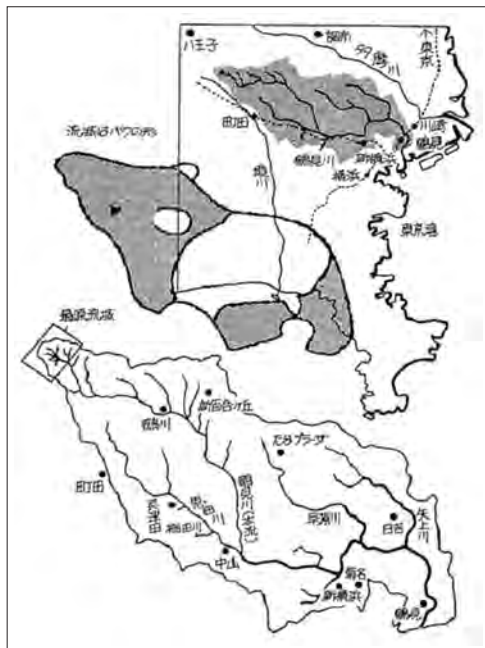
氾濫の恐ろしさは、津波や地震の恐ろしさと同じで、当事者でないとすぐ忘れる。すぐ忘れて、治水は金がかかるからいらぬとか安易なことを言う。いま鶴見川の流域は、大雑把に言えば2日間300mmくらいの豪雨には耐えるようになった。治水努力の大成果です。しかし、1958年の雨がきたら鶴見川流域は今もたぶん大規模に氾濫します。1958年規模の雨に対応できるような河川整備は、今現在鶴見川中下流には出来ていないはず。50年に一度の雨が今後温暖化してきたら30年に一度になるかもしれない、20年に一度になるかもしれない。大げさに言う必要はないけれども、冷静に危険性を計算して、もう大丈夫なのだ、河川管理はおおげさなのだとかいう言説にまどわされないバランスのとれた流域管理、そういうことを応援しつつ、アメニティーも、生物多様性の保全も、福祉・次世代育成もすすめる流域市民活動を推進したいと思っています。

——急激な流域開発と複雑な行政配置

鶴見川流域はバクの形(図1)。ご存じの方が増えています。鶴見川流域活動を始めた私たち鶴見川流域ネットワークキングがマスコットにしているものです。バクの形のその流域は、1958～2003 年間に激しく市街化されました。58年当時流域の市街地率は10%程度であったものが、2003年には85%近くになっている。45年間に70%をこす急激な開発があったということです。流域の緑や農地は激減し、保水、遊水力も激減した。戦後の経済成長にそった激しい流域開発は、鶴見川流域の危機を考える基本の基本の事実ですね。

そんな危機への対応を困難にしてきたのが、流域や水系に関連する行政区画の複雑さです(図2)。鶴見川の流域は東京都、神奈川県、町田市、稲城市、川崎市、横浜市の一部にひろがっています。生態系としてはひとまとまりの鶴見川流域が行政的にはジグソーパズル

図1 鶴見川の水系・流域の図



『リバーネーム』1994、岸田二、リトル・モア、より。

く畑にするのをやめましょうなどを書いてあるのです。

また体験談になってしまいますが、私は1990年になってこの文書を読んでびっくりしました。自分がやりたい重要なことが書いてあった。私は町田の鶴見川源流の町に1985年に転居しました。源流の緑がこれから大開発されると聞き、ぜひとも良い形で保全したいと願っての転居でもありました。総合治水の計画文書に、そういう緑をこそ守りたいと書いてあったのです。鶴見川源流流域の広大な丘陵地は、流域の保水地域としてなるべく開発したくないという趣旨の地図が、河川管理者の作成した総合治水の管理地図に描いてあったのです。建設省河川部局と組める。そんな思いの象徴として90年以来、鶴見川源流の都立小山田緑地で、毎年、交流会を開いてきました。91年からは鶴見川源流祭という形式で、町田市長にも、そしてその後は京浜工事事務所長にもご参加いただき、源流祭の開催される小山田の地は、町田市にとって大規模な開発の候補地であると同時に、総合治水対策上保水地域として位置づけられていること、流域対策の保水拠点になっているのだから丁寧な開発を検討すべき地域なのであること、そう呼びかけることのできる場所にしてきたものです。

ちなみに、85年ごろに明示的になってきた源流開発の動向は、紆余曲折はありながら、総合治水の枠組、その後の「水マスタープラン」の検討を活かしてすみ、最終的には300ヘクタール規模の最源流の開発予定地のうち100ヘクタールを緑と農業地域で保全するという内容を盛り込んだ土地区画整理事業を推進するという方向で、地元、行政、公団、TRネットの合意ができたのでした。しかしいよいよ実施という矢先、激しい地価の下落があり、開発それ自身が国の命令で中止になったという経緯があります。源流に予定されていた2カ所、合計400ヘクタール規模の土地区画整理事業は止まり、広大な緑の領域が残されました。とはいえ、外見は見事な緑地保全の形になりましたが、予算の裏づけのある実質的な保全の担保は逆に低くなった可能性もあります。あの時、土地区画整理を実施していた方が、はるかに広い森が都市計画によって確実に残せたかもしれない。まことに難しい判断ですが、そんな思いもいだきつつ、広大にのこされた源流保水の緑と日々おつきあいする鶴見川源流ネットの暮らしが続いています。

そんな混乱の中、うれしかったのは、当時の町田が源流の中心部を10ヘクタール規模でまとめて買い上げてくださり、水マスタープラン推進式当日（2004年8月28日）の席上で、市長寺田さんが、「保水の森として周囲の公有地とあわせて保全してゆく」と表明してくださったことですね。その後、現石坂市長さんのもと、40ヘクタール規模の最源流の谷戸山地帯で、鶴見川源流ネットワークの谷戸山再生作業がすすめられているところです。

水質の危機と改善

かつては水系全体に水質の危機もありました。いま、子どもたちに「鶴見川を

綺麗にしているのは誰ですか。」と聞くと、「ゴミを拾う子どもたち」とかわいらしい誤解があるのですが、子どもたちや大人がいくらゴミを拾っても、風景はともかく、あの鶴見川の水質が綺麗になることはありませんね。住んでいる人々が約190万人、この人たちが毎日毎日出す大量のうんちやおしっこを処理するのは、子どもたちのごみ拾いではなく、下水処理場の仕事です。鶴見川の場合、流域内に7カ所の下水処理場があります。1カ所で20万から30万人分、毎日毎日トイレの汚水、流しの排水を綺麗にしています。

その下水道の力によって、1980年以降、鶴見川の実質的な水質は大幅な改善をみせています。アユも、マルタウグイももどってきました。下流の夏・秋は、ハゼを釣る市民で賑わっています。1980～90年代初めにかけて激しい汚染のすすんだ源流域も、壊滅の寸前で下水処理がすすみ、ホトケドジョウや、スナヤツメや、ギバチなどの絶滅危惧種が、無事回復を遂げています。

鶴見川流域に住む人は河川・下水道管理者に大感謝する必要がありますね。

流域視野の生物多様性保全計画

鶴見川の流域では、流域構造にそった自然の体系的な保全の計画も策定されたことがあります。総合治水対策の枠に沿って、実は1996年に環境省の生物多様性国家戦略推進のモデル地域に選ばれて、96年から2000年まで環境省と関連自治体、それを応援する国土交通省京浜河川事務所とTRネット4者共同で生物多様性保全モデル地域計画（鶴見川流域）を推進しました。鶴見川にもまよりの良い自然拠点がまだしっかり残されている。これをどう守るか。流域を8つの小流域にわけて本流支流の構造にそった保全計画をたてたものです。鶴見川には公園その他、すでに担保されている保全地が大小いくつもありました。ところがそこに、市街化調整区域＝保水地域を重ね合わせると、調整区域なのにまだ保全の担保の見通しのないギャップがたくさん出てきたのです。

当時私は、環境省の生物多様性国家戦略を応援するエージェントの一人だったのですが、そのギャップ部分に色を塗って担当のスタッフと自治体を回り、あるいは開発主体を回って、流域の中の重要地点、保水拠点でもある重要地域だからなるべく開発しない、開発するとしたら生きものがにぎわうような公園を作ってくれとお願いしてまわりました。そんなお願いをとおして、自治体や開発主体のおおよその合意をいただけた部分を、「生物多様性重要配慮地域」という名称で指定し、公表したのですね。

この分野で、町田市は本当に大きな貢献をしてくださいました。最源流部に大きな緑がのこったのは、見方によってはその結果ということもできるのです。川崎の犬蔵というところは、東急電鉄事務局が土地区画整理事業を実施した場所ですが、開発の中で在来の自然を最大限に活かす公園計画等を推進していただくということで、「生物多様性重要配慮地域」に指定させていただきました。

その後当地では、npoTRネットと土地区画整理組合・東急電鉄事務局が相談の上、絶滅危惧魚類ホトケドジョウが豊かに暮らすことのできるビオトープが整備され、立派に管理されています。

とはいえ、画期的なところみであったはずの「生物多様性保全モデル地域計画（鶴見川流域）」それ自体は、環境省が2002年の第二次国家戦略策定にむけて、「里山」をキーワードとした地域戦略に転じたため、中止、中断、頓挫ということになってしまいました。環境白書に載った水と緑のネットワークのモデル図も、現在、環境省は使っておりません。

そして流域水マスタープランへ

環境省主体による「生物多様性保全モデル地域計画（鶴見川流域）」の計画策定、関連事業推進が一段落した1999年。総合治水対策を多自然・多機能化するさらに総合的な流域計画の策定を目標として、国土交通省関東地方整備局・京浜河川事務所の支援によって「鶴見川流域水マスタープラン」の検討がはじまりました。

多自然化とは、総合治水を多様な自然環境の保全をとめないながら進めるという意味です。多機能とは治水を流域視野ですすめる総合治水ばかりでなく、水量水質の改善も流域でやりましょう。自然の保全・生物多様性の保全も流域の視野ですすめましょう。大震災が起こった場合のことを考え下流の大火災の予想される地域では水系の水や川辺のひろば・船着場を活用した震災時・火災対応の防災も水系・流域意識ですすめましょう。そして流域計画を推進する市民・地域文化の応援を募るために水辺のふれあいを通して流域意識の育成を本格的にすすめましょうという、多軸、多機能の流域計画を目指すという意味ですね。全体で5本の流域ビジョンの柱をたて、統合的な流域計画、「水マスタープラン」を策定しようということになりました。

たとえば自然環境保全の分野では、環境省が放棄してしまった「生物多様性保全モデル地域計画」をそっくりいただいて、水循環健全の観点から再調整し、流域ランドスケープにそった水と緑の全体保全課題を組み込みました。治水はもちろん中心軸として総合治水の強化を柱の一つとする。さらに水量・水質に係わる流域対策、水系を利用した震災時の火災対策も流域でまとめてやろう。それらを円滑にすすめるには、我々はバクの形の流域に住んでいるんだという流域市民意識の醸成が重要で、これも大きな柱にする。ということで、「洪水時水マネジメント」、「平常時水マネジメント」、「自然環境マネジメント」、「震災・火災時マネジメント」、「水辺ふれあいマネジメント」の5本のマネジメントを柱にした総合的な流域プログラム「鶴見川流域水マスタープラン」が、6年の歳月をかけて策定されたのです。

計画は2004年8月28日、会場にはTRネットメンバーや応援のこどもたちも詰め掛ける中、国土交通省関東地方整備局、関連自治体の行政責任者たちのサイン

によって成立、推進されるところとなったのでした。またその日を機に、従来の総合治水対策協議会は、鶴見川流域水協議会と名称を変更し、国土交通省京浜河川事務所が事務局を担当する方式で、新しい流域管理の時代にはいったのです。水マスタープランは、流域自治体全部の参加する協議会が推進する枠組みになっています。法律に基づく計画ではないので、県知事、各市の市長、都知事は代理人、それから国土交通省関東地方整備局長のサインで合意された憲法みたいなものですね。

水マスタープランは、1992年のリオの地球サミットで提案されたアジェンダ21に似ています。それを地域版にしたローカルアジェンダが世界各地で工夫されていますが、その流域版といってもよいかもしれません。治水、水量水質、自然保護、防災、地域文化育成にかかわる21世紀の鶴見川流域の諸課題を、いろんな主体が連携連合して推進しよう。そのための基本課題、基本方策の方向、さらに具体的な諸課題のメニューが整理され、枚挙されている水マスタープランは、21世紀鶴見川の流域アジェンダなのですね。さまざまな流域課題について、関与するありとあらゆる主体が、だれだれが協力すればこれが出来る、あれが出来るという形で連携を組み、課題ごとに「アクションプラン」をきめ、主体的・連携的に解決していこうという方式。水マスタープランは、多様多彩な流域事業実行者の登場を待っています。ちなみに、治水と河川管理の基本については、法律にさだめられた計画として、すでにマスタープラン推進のためのアクションプランが策定されており、順次、テーマごとのアクションプランが実施プロセスにはいつてゆきます。TRネットのすすめてきた流域クリーンアップ作戦も、今年7月、市民提案第一号のアクションプランとして認定されています。

——流域連携の市民イニシアティブを発揮するTRネット

TRネットはもともとそれぞれのビジョンで川や流域をいい場所にしていこうという団体、13団体が任意に集まって出来た団体です。立ち上がった時にすでに中心メンバーたちは、総合治水対策のビジョンの美しさに打たれておりましたので、スタートから総合治水対策を市民サイドから応援する、さらには鶴見川の河川環境管理基本計画を応援すると、はっきり明示しておりました。行政が頼んだ訳でもないのに勝手に応援するぞ、と。何故そんな志でスタートしたのかといえは、京浜河川事務所が一人頑張っても、流域の関連行政との連携はきっと困難の連続になる、しかし協で市民団体が応援すれば、関連行政や企業を流域連携にくみこんでゆく仕事には、我々に出来る事がいっぱいある。リーダーたちが、最初からそうみきわめていたのですね。

今現在、鶴見川の流域(図3)には、任意連携組織である連携鶴見川流域ネットワーク(連携TRネット)に参加する団体が42(2009年10月現在)あります

(図4)。それらが町田のグループ、青葉区のグループ、緑区のグループ、港北区のグループ、都筑区のグループ、鶴見区のグループ、川崎幸区のグループ、そして恩田川のグループと地域・亜流域ごとに分かれて活動する。これをサブネットと言います。個々の団体も、サブネットも、全体として理念やビジョン、スタイルを共有しつつ、それぞれ

がそれぞれの活動を進めているのですが、2003年以降は、NPO鶴見川流域ネットワークが事務局を担当し、サブネット代表による流域世話人会を通して全体調整をすすめています。2003年度以降のTRネットは、npoTRネットと連携TRネット組織、2つの組織の協働活動として推進されるようになりました。その全体が鶴見川流域ネットワーク、略してTRネットということになりますね。

ちなみに、和光大学・かわ道楽や共生センターさんも混ざってくださっている町田のサブネットは、鶴見川源流ネットワークとよばれるTRネットの地域組織で、現在10団体で構成されています。源流集団は各地で大きな規模の複雑な仕事をすすめるので、ここにまた入れ子でNPO（NPO鶴見川源流ネットワーク）があり、東京都関連の財団や町田市と契約して、小山田緑地の管理や、広大な源流の森の保全再生活動などを受託し事業を推進しています。

——TRネットのビジョンと連携活動

・流域地図の共有

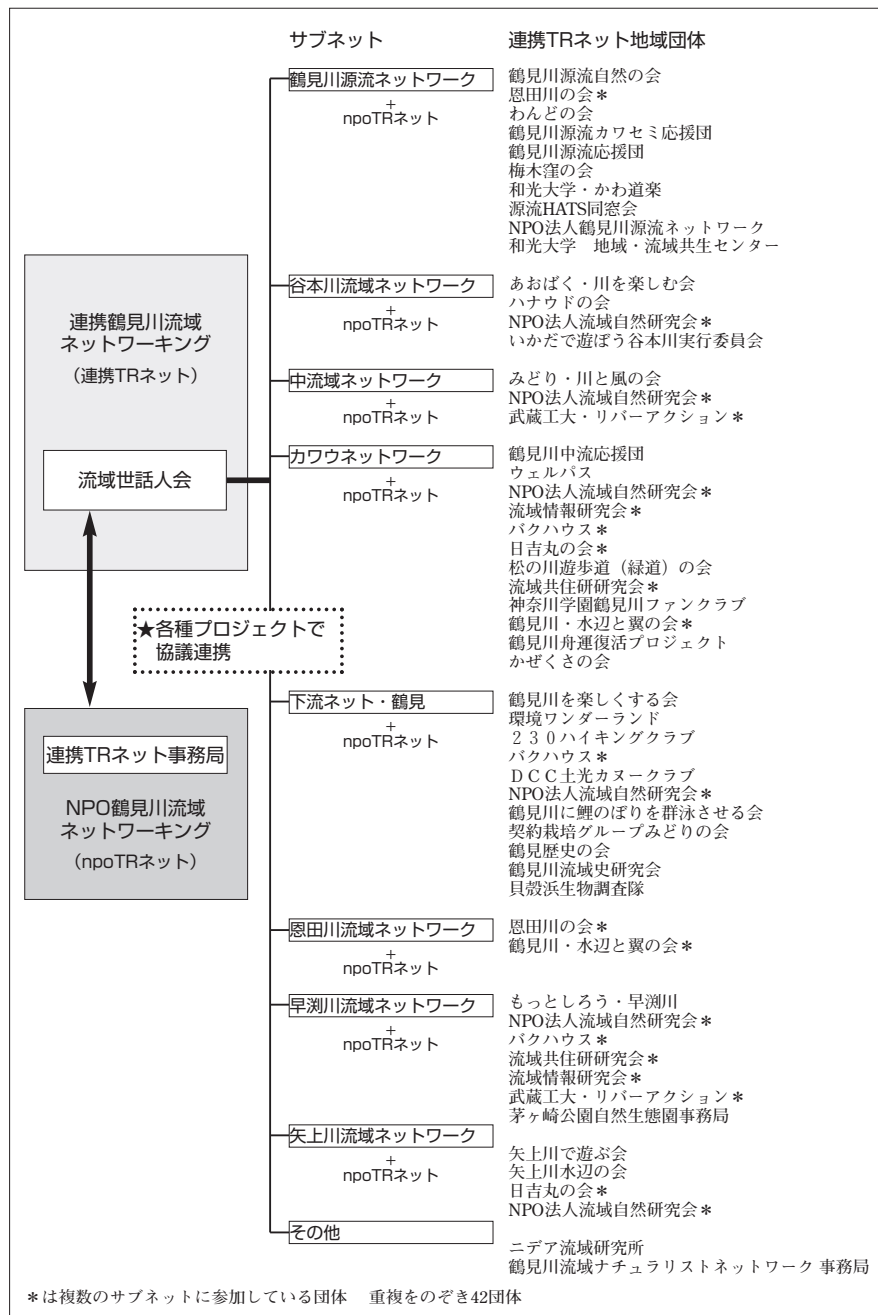
TRネットの連携活動は、〈流域地図の共有〉を基本としています。バクの形の流域地図の共有がTRネット活動の基本の基本の基本です。横浜市域の本流下流部の大きな橋にはしばしばバクの絵が描いてあります。また、本流、恩田川は、ほぼ500mおきにバクの絵の書き込まれた距離杭が設置されて、散策者の助けになっています。さらによく調べれば、流域内各地にバクが描かれています。バクの形の流域地図の共有という基本課題は、流域市民活動をこえて、行政、企業にまでひろがってきた。地域活動の長い歴史のスパンで見れば、これこそTRネットの流域活動のなによりの成果といってよいかもしれません。

図3 鶴見川の流域・亜流域配置



npoTRネットHP <http://www.tr.net.gr.jp>より。

図4 TRネットの組織図（2009年10月現在）



『バクの流域へようこそ』2009年版：npotrネット、より作成。

・流域視野の自然保全の提案

それと関連して、流域視野の水と緑の拠点の保全も、大きなアピールのポイントでした。筆頭はもちろん「源流を守ろう」。みんなで、流域全体で協力してバクの鼻先の保水の森を守ろうということでした。おかげさまで、源流の泉は流域名所になりました。今、源流は最源流に40ヘクタール、その周辺に200ヘクタール規模、さらに大雑把に言えば源流にあたる町田北部丘陵とその南側の緑をあわせて900ヘクタール規模が緑で残されています。我々が当初予想したよりもはるかに大きい形で保全がすすんでいます。

河口生麦の干潟をみんなで守ろうという提案も重要でした。いま河口生麦には、みごとな干潟公園が出来ました。スタート時にTRネットがアピールした夢そのままですね。

高水敷の自然回復もすすんでいます。これはまだ本格的な行政事業にはなっていないのですが、たとえば本流の中下流域では、TRネットの力で5,000m²か6,000m²程、アレチウリを排除しつつオギの自然群落を復活させるという自然植生回復が進んでいます。

本流・支流をとわず、流れにそった多自然拠点の整備もすすんでいます。新横浜の巨大遊水地を始め、各地の調整池などの多自然化も進んでいます。

いま振り返ると、総合治水、水マスタープランと連携しつつTRネットが提案した大きなビジョンは、概ね実現しているのです。18年間の成果です。

・賑わう拠点活動・源流域の事例

鶴見川流域で連携TRネット参加団体やnpotRネットが定例活動している持ち場拠点は25～30カ所です。例えば「恩田川の会」という団体は恩田川、高瀬橋の周辺を拠点に、毎月第3日曜日に調査・自然観察・自然管理などをすすめます。公開されていますので、活動に子どもたち、大人が来ればちゃんと対応します。基本的な拠点は、どこでも、どの団体もそうなのです。

流域連携発祥の地の一つとなった鶴見川源流泉の広場は、1989年に保全されて以来、現在もなお、TRネットの現地グループが月2回草刈り清掃をやっています。源流が保全されたので、泉の広場の奥地にあたる40ヘクタールほどの谷戸山が源流ネット受託による森林回復の作業地になっていることも、既に触れたとおりです。水マスタープランを記念して、鶴見川源流の泉保水の森という名前がつけられた当地では、荒れ果てた竹林をどんどん切り、雑木林再生をすすめています。近隣の畑に子どもたちがどんぐりを植え、そだった苗を整備の進んだ谷戸山に移植する作業も始まっています。切り出した大量の竹で、保水・土砂流出防止のためのダムのような堰も作ります。アレチウリの進入で荒れ果てた源流最源流2,000m²の谷では、町田市とNPO源流ネットが全力で阻止活動を展開しています。

高ヶ坂のめだか池は単なる調整池だったのですが、清水が湧いていて、水にメ

ダカなどを放したらうまく増えたと町田の下水道の課長さんが嬉しそうにおっしゃって、折から推進中だった生物多様性モデル地域計画ともからめて環境省の補助金も活用し、メダカ・トンボの大ビオトープ整備がすすんでいます。池の中に石で「め・だ・か」と書いてあるのは、当初の熱気のしるし。本当に嬉しい光景です。

・川辺や緑の管理・各地での工夫

川辺ビオトープの管理・活用も各地で進んでいます。たとえば、東急の綱島駅の脇にある綱島バリケン島は、15年ほど前まで、引き潮時に現れるゴミの堆積場でした。しかしそこで、15年も草刈りを続けて世話をし、いまはヒメガマの見事な湿原が出現しています。その上手には、クロベンケイガニが多産するカニ島というビオトープもあります。絶滅危惧の植物の回復などもあり、子どもたちの学習の場としても頻繁に活用されていて、毎月第四土曜日、たくさんのボランティアがつかめます。

緑の管理への参加については慶應日吉キャンパスの例を紹介します。40ヘクタール規模のキャンパスは、鶴見川流域の一部、そこに10ヘクタールを越す森が広がっていますが、管理不足で一部は荒れ果て放置されていました。そんな森で、慶應大学日吉丸の会が、1990年ぐらいから活動しています。反応する学生は大体1万人に1人なので、私一人で草刈りをする年もあるのですが、それでも20年。現在は、5,000㎡ほどの拠点地域を中心に、1ヘクタール近い森林回復をすすめています。目標は水循環の健全と、生きものの賑わいにみちた雑木林を回復すること。とくに水循環の回復は、近隣や流域にご迷惑をかけないようにする趣旨からいっても大きな課題です。慶應の緑は、日吉丸の力の及ぶ一部をのぞいて適切な管理をうけていませんので、枯れるものは枯れる、倒れるものは倒れる、ここに降った雨はほとんど保水されずに流されているのが実状です。保水力の高い雑木林を回復し、池のビオトープや、多自然型の調整池も工夫して、水循環健全に貢献する流域キャンパスを実現したいというのが慶應日吉丸の夢ですね。保水をしっかりやる。緑をしっかり管理する。そういうことに子どもたちや学生が関与するようなシステムで繋ぎたいと思っています。

・npOTRネットの仕事

以上のような各地の活動をふまえ、つなぎながら、npOTRネットは全体のお世話をします。ホームページ、通信冊子等による情報配信。また、いろんな流域団体が推進するイベントを支えています。多くのイベントがあるので、それを調整して水マスタープラン推進のためのイベントカレンダーを提供します。多分これに出ているイベントの8割から9割はTRネットの参加団体のイベントだと思います。

鶴見川流域のクリーンアップもやります。多くの企業、麒麟ビール、東電、東ガスやパナソニックなどの巨大企業が流域にあり、それぞれ繋がって大変な賑やかさになっています。流域全体のクリーンアップとしてnpoTRネットが推進する「鶴見川流域クリーンアップ作戦」は、実施ならびに報告書の作成にあたり、多くの流域企業の協賛・協力をいただきます。2008年15回目は、40カ所から50カ所でイベントが行なわれて70から80団体が参加しています。

行政による事業的な対応がまだ実現しない状況にある高水敷の多自然管理も、地域の任意団体npoTRネット独自で進めています。和光大学の近くだと鉄町の高水敷管理が一番伝統があり、10数年の歴史があります。規模が大きいのは鴨居の左岸側高水敷。神奈川県横浜治水事務所が推進する鶴見川協働保全プログラムに参加する形でnpoTRネットが軸となり、オギ群落の回復維持を継続してすすめています。次いで大きな規模の作業は、綱島の早瀬川合流点寄洲における3000m²規模の高水敷管理。ここでは全域を覆い、自然植生を破壊してしまったアレチウリを排除するため、オギの自然群落を全面にわたって回復する本格的な作業がすすんでいます。鴨居での作業、さらに早瀬川親水広場における自然植生回復作業とあわせ、これらのボランティア作業は、三井物産から大規模な助成金を受けてnpoTRネットのプロジェクトとしてすすめられています。

npoTRネットが推進役となって、流域の自然調査もすすめられています。冬季の鳥の調査はすでに20年に近い蓄積となりました。魚の調査もやります。従来からアユの遡上^{そじょう}調査をしていますが、2008年からは、水系全域の魚類総合調査もトヨタ財団の大型助成金で始めています。

子どもたちの環境学習支援は、TRネットの最大のミッションのひとつです。水辺に安全で魅力的で、さらに市民団体による安心サポートのある拠点を作りだし、子どもたちの野外活動の場を確保します。その上で子どもたちを水辺に招き、川の体験をしてもらう。ライフジャケットを着せて魚捕りをさせます。パッタとりもします。クリーンアップ活動もあり。2007年度は行政からの受託事業もあり、NPOだけで年間でのべ4,165人日、子どもたちのお世話をしました。任意団体も実施しますので、TRネットの流域連携全体では、2007年はのべ5,000人ぐらいの子どもたちをお世話したのではないかと思います。

子どもは4歳から8歳ぐらいは生きものと遊び、8歳から11、12歳ぐらいまでは徹底的に足元の大地を探索して地球と仲良くなるのが正しいという思想に基づいて「バクの流域ワンダーランド学習スタンプラリー」もやります。流域の市民活動拠点、企業の環境貢献拠点、行政の拠点などにスタンプを置いてもらい、そこへ行ったらスタンプを押してあげる。2カ所行って流域センターへ行くと参加賞があるという仕組みで動いています。まだ期待通りの成果というわけではありませんが、多様な地域をまわる子どもや家族の数は着実に増えていると感じます。「それを作れば彼は来る」。『フィールド・オブ・ドリームス』の考えで頑張っ

まいます。次世代には2つのグループがあります。ただ虫さえ見れば嬉しい、魚だけ見れば嬉しい、水に入ればもう嬉しいという子どもたちと、褒められないと仕事をしない思春期の青年たち。その両方を繋げて、流域の大地で、総合的に次世代を育てる工夫をすすめていかなければいけないと思っています。

もちろん成人対応もすすめます。基本は水系・尾根をたどって流域を歩く文化をそだて、流域意識をはぐくんでゆくこと。TRネットはこれを「流域エコツーリズム」と位置づけて重視しています。具体的には、鶴見川流域マップを3種類作って、流域の書店、たとえばトレッサ、鴨居のららぽーとなど大きな書店で、一般頒布もすすめています。地図を頼りに、本流・恩田川ではバクの距離杭も頼りにして、流域の水辺と緑の拠点、さらにはスーパー銭湯オフロの国など民間施設や、各地の治水施設、そして鶴見川流域センター、サブセンターなどもたどってもらうのです。流域エコツーリズムの分野では、毎年正月2日間をかけて鶴見川源流から河口まで全42kmを歩くという鶴見川新春富士見ウォークというイベントを実施しています。両日100人、合計200人ぐらいの参加者があり、驚くほどの盛況です。

ツーリズムも学習支援も、総合拠点はもちろん、新横浜多目的遊水地管理センターに併設されている鶴見川流域センターですね。そこで防災の勉強も自然の勉強もする。ここへ行けば河川管理者がどのような努力をしているか、下水道管理者がどのような努力をしているか、鶴見川流域ってどんなに面白くて危険なところかということがよく分かります。水族館もあり、6月頃になれば鶴見川でその年に遡上した若アユが泳ぎます。流域センターのすぐ脇で若者が投網で捕ったアユをすぐ入れるのですね。鶴見川の水質は全国ワーストランクで魚などすめるはずがないと頑固に信じている市民は、その光景に仰天します。

——行政・企業等との連携活動

TRネットは他にも様々な連携事業を展開しています。

河川管理者や自治体との連携は流域各地で、多種多様なひろがりを見せています。もちろん行政ばかりではありません。クリーンアップや、環境学習、環境整備活動、さらに地域活動支援などの場では、キリンビール、東京ガス、パナソニックをはじめ多数の企業や商工組織などと連携します。学校とのおつきあいは、主として小学校などの学習を支援する活動ですが、連携して諸課題の解決にあたる連携もあります。和光大学、東京環境工科専門学校などとの連携は、その見本といっていいですね。

それらの連携をマトリックスにすると、おどろくほどの多彩さになっていることがわかります。鶴見川水系の河川管理にかかわる行政部局は、行政区がどこであれ、基本的には情報・活動の連携関係があります。河川管理者以外の自治体

部局についても、緑地の保全管理や、まちづくり、学校支援等さまざまな領域で連携がすすんでおり、これからさらに大きな連携・応援を期待しているところです。

環境管理の実践支援や、TRネットによる学校支援の領域では自治体との連携がさらに必要です。この分野では、横浜市港北区、川崎市は高津区と麻生区が、npoTRネットに学校支援の分野で受託事業を提供してくださっています。地域の学校、子どもたちに思い切った、感動的な河川流域学習を提供することができる。本当に助かる支援ですね。

流域ツーリズムも街づくり支援も希望がある。企業分野での連携も希望が広がっており、とてもうれしい。例えばパナソニックモバイルコミュニケーションのボランティア組織であるPGV（パナソニック・グリーンボランティア）さんは、昨年来、鶴見川最源流の保水の森を東日本地区の研修拠点としてくださいました。鴨居の高水敷では、すでに地元のいくつかの中小の企業がnpoTRネットのアドバイスのもとで在来植生管理をすすめてくださっているのですが、これにも参加してくださることになりました。

先に紹介した流域全域で大規模におこなわれるTRネットのクリーンアップ作戦は行政だけでなく、多数の企業の後援なしではとうてい実施できません。支援・連携の輪がますます広がっていることをご報告できるのは本当にうれしいことです。

TRネットが推進する流域ツーリズムに関しても、広報、助成金等を介してさまざまな企業が支援してくれるようになりました。

これもすでに触れたとおり、地球温暖化とならんで地球規模で心配されている生物多様性保全の領域でも、TRネットは河川環境管理財団、トヨタ財団、さらには三井物産など、たくさんの財団、企業からの資金支援をいただいています。

学校連携は、TRネットが支える側というだけでなく、TRネットがささえられる連携もあり、拡大中です。慶應からは有志の学生たちOB・OGたちの強い支援があります。環境工科専門学校については、TRネットによる授業支援にくわえ、学校による幹旋もいただきながら多数の学生がnpoTRネットの源流・中流における環境管理活動にインターン型の支援参加をしてくれています。そして本日、このお話の機会を提供してくださっている和光大学。和光大学の「かわ道楽」の学生たちがいなければ、いまTRネットの流域活動は動きません。流域の学生の動きを支える軸は和光大学と、環境工科専門学校。和光大学には地域・流域共生センターを通した連携も実現していただき、本当に感謝しています。

学校は流域の未来の希望の拠点と私は考えています。大学に限らず、高中小のキャンパスに、しっかりした流域活動の芽、文化を育てたいと願っています。たとえば小学校の校庭に、ミニチュア版の水循環健全の流域構造を作る。雨水貯留をすすめ、雨水利用もするし、池や草地や木立のビオトープ管理もする。慶應大

学にはいまホトケドジョウのくらす池のビオトープがあります。中学生と日吉丸が協力して作り上げました。和光にも象徴的なビオトープがありますね。そんな活動を基本として、鶴見川流域のすべての学校キャンパスを対象として、雨水を有効に貯留浸透し、活用し、水循環学習やビオトープ学習にもつなげる〈学校流域プロジェクト〉を推進し、そのようなキャンパスの流域相互支援として、〈キャンパス・ウオーターシェッド・アクティビティ・ネットワーク〉(Campus Watershed Activity Network ごろあわせで、カワネット＝CAWA-NET) などという連携をそだててゆきたいというのが私の夢の一つでもあります。

どこに拠点をつくり、だれがお世話をするのか。npOTRネットはもちろん頑張るのですが、学校サイドで中心拠点となるのは和光大学、地域・流域共生センター、かわ道楽ということなのではないかと思います。

そろそろまとめの話です。

和光大学がある和光の谷は100ヘクタール弱、市街地率が85%から90%と鶴見川流域の現状とほぼ同じ市街地率です。おとなりの農業地域である岡上の谷戸は、市街化率は多分10%から15%ぐらい。こちらは50年前、1958年時点の鶴見川流域とほぼ同じ状況ですね。和光大学の足もとには、大開発前の鶴見川流域、大開発後の鶴見川流域のミニチュアが、しっかり並んで存在するということです。この二つの谷戸、つまり小流域をモデルにして、大規模に開発された流域で水循環健全を理念としてこれから何が出来なのか、他方岡上農地の流域では、緑をまもり農業を支援し、保水や生物多様性保全をすすめながら、地域振興も支えることができるようなどんな工夫があるか。和光大学地域・流域共生センターが世話役・調整役になり、鶴見川流域水マスタープランのミニチュアのようなビジョンを地域・流域協働で育て、実践してゆくことができたらしらと思うのです。そんな連携と実践の輪の中に、和光の学生だけでなく、慶應の学生も環境工科の学生も、そして志ある市民も参加できるような工夫を和光大学がすすめてくだされば、さらに嬉しい。地域・流域共生センターが、NPOなども工夫し、また企業等による適切な助成金なども受け、継続的な推進の核になってくださることを期待して、話を終わりたいと思います。

[きし ゆうじ]